

## 伊藤 整「街と村」論

——女性の幽鬼たちについて——

(一)

伊藤整「街と村」は、雑誌『文芸』昭和十二年八月号に発表された「幽鬼の街」と、翌十三年、雑誌『文学界』八月号に発表された「幽鬼の村」からなる中編小説である。昭和十四年五月、第一書房から刊行された際、「序」を加えて、「第一部・幽鬼の街」「第二部・幽鬼の村」という構成となった。

「幽鬼の街」「幽鬼の村」それぞれの発表当時の評価は、さほど高くはなかった<sup>①</sup>。また、「幽鬼の街」をめぐって、中条百合子と整との間で論争が行なわれたこともよく知られている<sup>②</sup>。

昭和十三年七月、すなわち「幽鬼の村」発表の前月、『文芸』に掲載された整の「自作案内」には、「幽鬼の街」に、ほぼ満足していること、現在執筆中の「幽鬼の村」と一緒にして本にするつもり

上 田 正

であり、本で読まれる方が正しいだろうと考えていることが述べられ、もう一度くり返すように、「私の書いたもので多少「もの」になつてゐる唯一の作品であらうと思う。」と書いている。

このように整は、「幽鬼の街」に対する並々ならぬ自信を持ち、また、この作品を「幽鬼の村」と一緒に、まとまったものとして読まれるべきだと述べているのである。平野謙は、「幽鬼の街」発表時に、中条百合子との間で論争があったことに触れて、

そういう論争の経過などもあつて、伊藤整としてはアトにひけない気持から、「もの」になつてゐる唯一の作品などと、かなり強気の口吻を示したのかも知れない。

と書いているが<sup>③</sup>、論争は両者の立脚点の相違ばかりが目につき、整が「強気」に出ざるを得ない状況とは思えない。やはりこれは、先の「自作案内」にもあるように、「生物祭」「イカルス失墜」と同

系統の「一番書きたがっている作品」が書けたという満足感と、詩から小説へと転じ、短編ばかりを発表してきた整が、初めてまとまった量の小説を書き得たという自信からくるものと受け取るのが妥当だと思われる。このエッセイ中、枚数に関する言及が、くり返しなされており、長いものが書きうるという、今後の展望がひらけた安堵感があったと考えられるのである。

以後、多くの評論家・研究者によって、この作品は取り上げられてきた。「整の代表作の一つ」「伊藤整にとって画期的な意味を持つ仕事」といった、それぞれ瀬沼茂樹・奥野健男による肯定的な評価、また一方で佐々木基一・平野謙<sup>⑦</sup>による、やや否定的な見方など様々である。

従来、この「街と村」は、ともすれば「第一部・幽鬼の街」のみを取り上げることが多かった。文学全集などに収められる場合も、「幽鬼の街」だけのケースが半数を占めることは、曽根博義氏作成の表からも明らかである。第一部、第二部それぞれに独立性があるというものの、整自身の言及にもあるように、一つのトータルな作品として検討する必要性を感じる。

近年このような方向から、すなわち作品「街と村」を対象としてなされた研究が提出されてきた。本稿も作品中、一見アト・ランダムに登場する幽鬼たちが、実は第二部の結末に至るまで、たくみに

構成が計算されていることに着目し、その中で重要な位置を占めると考えられる、作品を貫くタテ軸としての女性たちについて、以下、論考を加えたい。

## (一)

作品は東京で生活している私・鶴藤つとむが、久し振りに郷里・北海道に帰省し、学生時代を過ごした町・小樽を訪れ、次いで故郷の村に帰るといふ筋立てになっている。第二部中に「昨日色内停車場の〜」と、小樽での出来事が書かれていることから、村に帰ったのは街を訪れた翌日、つまり時間的にみると、二日間の出来事を記した小説というわけである。この二日間に、これらの土地で過去に関わりを持った人々が、主人公に次々と幽鬼となって襲いかかってくる。

最初に現れる幽鬼は久枝である。この久枝の登場に対して、私は「当惑」から「にやにやとして立ってい」るだけなのであるが、ホテル内へと誘われると、「宿命的なものが、ホテルの暗い廊下の奥から私たちに糸をかけて引っばっているような気がした。」と感じ、久枝のなすがままとなってゆく。久枝は二人の思い出の部屋などを私に示し始め、次に白い洗面器を持ち上げて次のように言うのである。

——これですよ。あなた覚えていてでしょう。忘れようたつて忘れられる訳がないわよ。

このように言う久枝は、「きつと歯を噛みしめ、眉の間に豎に皺をよせて、発作でも起しかねない凄じい顔になって私につめ寄つ」てくる。幽鬼としての本領を発揮しだすわけであるが、それに対し鶴藤は次のように反応している。

だが私には解らないのだ。一体この傷んだ洗面器が私と彼女に何の関係があるのだろう。私には解らないのだ。しかし、どこやら心の隅で何かが思い出されそうであった。

この部分には興味深い点が見うけられる。久枝のもの言いに比べて、ここには自らの過去に対して、不都合なことは思い出したくないとする、主人公・鶴藤の自己防御が強く働いていると思われる。「私」は以下登場する他の女性たちに対しても、相手の名前が思い出せなかつたりするのだが、「怖ろしい」と繰り返し強く感じる「私」の、これら女性の幽鬼に対してのみ見られる反応が、この作品中に占める女性たちの位置の重要さを物語つてはいはしないだろうか。

久枝の二カ月にわたる入院中、その原因が「私」にあるにも関わらず、「私」は一度も見舞いに行こうとはしなかった。「私」はその理由を「罪の怖ろしさ」と「耐えられない羞恥のため」だと言うが、

その一方で「外の女を追いまわしていた」のである。

鶴藤に人一倍羞恥心が強いという性情があるのは、作品を通読して感じることであるが、それが女性に対する身勝手さの大きな要因であるとは思えない。久枝以外も、性的な関係を持った女性を次々に捨てたとされる「私」が、そのような行動を取る理由は、作品中では明示されていないのである。

次に登場する女には名前が与えられていない。場所は色内停車場下の汚れた共同便所である。この女もまた、鶴藤との間に子供が出来たこと、その子供をこの場所で遺棄し、その秘密を持ったまま死んだと「私」に囁かれた声で告げるのである。

あなたのせいですよ。あなたはそうして、お若く、たのしそうちに生きている。小説家だつて、まあねえ。私のことをあなたは心の中で始末できないでいるじゃありませんか。

無限地獄で、死んだ児と逢うというこの女は、「私」にも、この地獄へ早くいらつしやいと誘う。「私」は無我夢中で逃げ出すだけで、結局この女が誰かもわからないままなのである。「私」との間に子供まで持った女性を、「昔の女たちの一人にちがいない。」としながらも、このように「思い出すこともできない。」のは、鶴藤の女性関係が複雑であったからではなく、前述のように気がかりな存在であるゆえに、思い出したいとしないとする心理が働いているからで

あろう。それを裏付けるように、この女は第二部において大きく変貌をとげ、重要な役割を担って再度登場してくることになる。この第一部の場面では、第二部で多く語られることになる地獄と、「お母ちゃん」という言葉に、これも第二部において展開される母と子の問題が伏線として提示されているのである。

以上の二人が「私」と性的な関係を持っていたのに対し、続いて登場するゆり子は趣を異にしている。ゆり子は「私」と本当の生活をするために生まれてきたと考えている女性であり、「私」に愛されていたと確信していたのであるが、「私」は、ゆり子に当てつけるように別の女性、栄子と仲良くなる。そして「私」は、その後も繰り返していた「好きでもない女たち」との恋愛を「墮落」だとして、ゆり子から責められるのである。

このゆり子には、第二部に登場するチャ子との類縁性が見られる。チャ子もまた「私」を愛しているにも関わらず、性的関係を持たず、他の女性と「私」との関係を知り、「身憚いのような怖ろしいという感じ」を持ち、「拭いようもない泥を塗られたような思い」で「私」を嫌悪して去ってゆくのである。

この作品には、以上のように相反する二つのタイプの女性が見うけられる。これは伊藤整の作品には、なじみ深いものであり、すでに指摘されているところである。<sup>⑧</sup>

同時に複数の女性と、それも相反する女性との関わりを持つことで、結果的にその両者を失ってしまうという関係のあり方は、この作品において直接的には、ゆり子と栄子、また、チャ子と「蟹工場」帰りのほしたくない女」という組み合わせに見られる。

また、主人公・鶴藤が、久枝や「色内停車場の女」を捨てたとされる理由も、彼女らとの性的関係の後、生じたわずらわしさや罪意識といったものとともに、作品には直接現われていない、同時に付き合っていた女性の存在ゆえであると考えられよう。

ただ、ここで注目しておきたいのは、久枝の恋人・ウラジミルから「私」が次のように言われている点である。

あなたの書いた詩の讚美者だった少女が大勢いました。多分この久枝さんもその一人でしたね。

主人公・鶴藤の現在の職業が明確に意識される部分であるが、「色内停車場の女」や、第二部に登場する洋子も、「私」が詩人であり、現在も「小説家」「著述業」であることを、ことさらに指摘している。

ここには「私」が当時創作していた詩をきっかけとして、多くの女性たちと知り合った事実がうかがえる。女性たちは、その詩作品から詩人としての「私」を想像し、付き合い始めるのであろうが、想像通りという訳にはいくまい。「私」もまた、それらの作品を書

いた詩人としての自分を演じ、本来の自分の姿とのギャップにいら立ちを感じて、自己嫌悪に陥っていくのではないか。そこから投げやりな行動が生まれてくるように思われる。「私」が詩を書くことによって生じた女性との関係に、自己の詩作品を大切に思えば思う程、罪の意識を抱いても不思議はないであろう。

また同時に、そのような関係を生ぜしめた詩人としての自分、文学者としての自分のあり方そのものが問われているのではないであろうか。つまり、「私」はこれら女性たちによって、過去から現在にいたるまでの詩人、小説家としての存在をも問われているのである。

様々な幽鬼に襲われ続けた「私」は、第一部終わり近くで、次のように描かれている。

私は胸がふさぎ、面は蒼ざめ、散ってゆく落葉のように自分が空しく思われた。君いま此処にただ歎く、語れや君、そも若きおり何をかなせし、という禿頭のヴェルレエヌの歎きが胸の奥まで苦く苦く滲みとおった。暗い穴の上で揺する揺籃のようなやさしい手を私はさぐりもとめた。ああ、その優しい手は何処にあるのだろう、私をいたわり、慰め、心の疵をさすってくれる手は、何処にあるのだろう。古い友、新しい友の冷酷な言葉の矢から私を護ってくれる人はどこにいるのだろう。

東京で生活している鶴藤は、学生時代を過ごした町・小樽へ帰ってこざるを得なかった。それは彼が過去を振り返らなければならぬほど、どうしようもない現在をかかえているからであろう。「私」の、過去を振り返ることにより現在の自己を検証しようとする試みも、このヴェルレエヌの歎きのように、過去の悔恨ばかりに終始し、現状の打開には程遠いのである。そして、そんな鶴藤は自分を「いたわり、慰め、心の疵をさすってくれる」ものを切実に求めているのである。

曾根博義氏は、主人公・鶴藤のたどるコースについて言及され、そのコースが小樽市街の外縁から、ほぼ渦巻状に内縁に向かい、中心部に行きつくことを指摘されている。そしてこの道順が、

いわば母胎としての街のなかに溺れ込んで安らぎたいという「私」の心の奥深くにある願望を象徴している。

と書かれている。この本文中に見られる「手」は、氏の指摘通り、主人公・鶴藤にとって母性的なものであることは確かであろう。「私」は「鼻のお銀」に導かれ、歓楽境へと入り、そこで幼なじみのヨシ子と出会う。そこで二人の会話は方言となり、村の話題がとりあげられ、「私」を第二部の舞台である「村」へといざなってくれるのである。そして方言を話し始めた「私」は、精神的にも、より故郷へと近づいていく。

「第二部・幽鬼の村」は、これら女性の幽鬼たちに追われ、また誘われながら、「私」が自分自身を「いたわり、慰め」てくれる、母なるものを求めての村行きであることを、第一部結末は示しているといえるであろう。

## (三)

村を舞台とする第二部において、「私」の、より幼少時の出来事が描かれるのは自然なことであろう。女性たちとの関係もまた同様であり、「私」は前述の二つのタイプの女性関係を遡行していこうとするかのようなのである。

——あれが、君の美しいと思った初めての女か？　なに、もう三年も前からあの子のことを思ってるって？　あきれたね！／——普通だろう」と私は赤い顔をした。

「私」が女性というものを最初に意識したのが、この「五年生ぐらいの少女」であろう。

この少女が精神的思慕を抱いた女性の原型として存在するのに対して、げんさんは肉体的な関係を初めて経験した相手である。

「私」に呼びとめられたげんさんは、「立ちどまってにこにこ笑うが、「私を誰と見当つかない」でいる。「苛々して」「忘れたかね。僕だよ」と言う「私」に対してげんさんは次のように答えている。

忘れたというわけではありませんけど。お顔はよく存じてるんですけど、いつおいでになりましたか？<sup>マ</sup>。彼女は相かわらずにこにこしていたが、当惑の色を浮かべた。

ここには奇妙な転倒が見られる。第一部冒頭における「私」と久枝の出会いとの転倒である。久枝と会って当惑し、思い出せないことがあったのは「私」の方であった。そんな「私」に激しい怒りをぶつけたのが久枝であったが、ここで腹を立て、どなるのは他ならぬ「私」なのである。過去の行状を幽鬼たちに告発され続けてきた主人公・鶴藤が、告発する側の立場を取っているのである。

——この魔物め！と私は大きな声で呶鳴った。長いあいだ彼女に対して抱いていた憎悪が、一遍に迸って出るようだった。

「たった十五の少年が何を知っていると思うのか？　この化け物め。俺は貴様のために悪い性分を植えつけられて、この二十年間もの間、自分でも苦しみ、罪のない女どもを泣かせるような羽目になった。この魔女め！」

こう言って殴りかかる「私」に対して、この女は、

さあ、そうでしょうか。私、そんな悪い女でしょうか。でもこの後家のおげんはここではこの二十年あまり、この村で無くてはならない人間だったのですよ」

と返答している。そして多くの村人がげんさんの味方をし、「私」

は逆に村人からとり巻かれ、殴られるのである。

告発する「私」は、結局相手にその非を認めさせることが出来ない。責められる側がその非を認めないという点で、第一部の「私」と第二部のげんさんは共通しているのであるが、げんさんは村の論理によって自己の行動を正当化できるのに対し、鶴藤にはそのようなものが与えられてはいない。それどころか、村特有のモラルからはずれた人間として「この村の者」だと認められないのである。

「私」は加害者でもあるが被害者でもあるという位置を与えられず、生まれ故郷の村にも受け入れられないという状況に追いこまれていく。

このように自己の内にある女性の原点に立ち戻った「私」は、村人に殴られた後、「何だかすっきり変わった人間になったような気がし」「ひどく空腹を覚え」て、瓜姫のもとへと行く。ここでの食欲は異様な程であるが、これは理性を持たず、食欲という本能に動かされていく、すなわち幼児期に退行していく「私」の有様をあらわに示しているであろう。そして「私」は天の邪鬼となって瓜姫を殺してしまうのである。

女性たちに様々な負い目を負い続け、またそのことを責められてきた「私」が、それらの女性にしたことと比較にならない罪を犯したのである。

しかし、この鶴藤の罪の極みとも云うべき「殺人」という行為は、母によって全て打ち消され、赦されてしまう。

——いや、お前でないよ。それは私が話してやった昔だ。お前は何あも悪いごとしたんでないよ（中略）／それは母の声であった。それは天の方からおりて来て、波のように、音楽のようにあたりに満ちひろがった。それは母の声であった。

第一部において「私」が捜し求めていた「優しい手」との出会いが、ここでついに現実のものとなったのである。久枝や「色内停車場の女」に赤ん坊がいたこと、また、「ねんねこに子供を背負い、お河童にした五つぐらいの女の子の手をひいた女」などの存在は、「私」との性的関係を強調するためとしては不自然なほどであった。これらの状況設定には、母と子の絆というものを目を向けさせようとする作者の意図が感じられる。

「私」がたどり着いたのは、故郷の村にいる母のもとであった。父親が「私」に「この村の往還をうるつくことはやめて、早く戻ってゆけ。大たわけ奴が！」と叱る存在であるのに対して、母親は全てを赦し、あらゆることから「私」を守り、受け入れてくれる唯一無二のものとして存在している。

佐藤和正氏は曾根氏による母胎回帰の指摘を受けて、鶴藤は母の胎内へと包まれて、はじめて外界を無化する事が

出来た。

と書かれている。そして母との邂逅後、作品に土着宗教的な雰囲気  
が急速に強まることを合わせて指摘されている。<sup>①</sup>

第二部には、その冒頭近くから、第一部では見られなかった宗教  
性が見られる。それは、お捨小母さんとチャ子の持っているキリス  
ト教信仰である。お捨小母さんは、いつも同じ箇所て聖書を読み止  
め、「私」は「その先を一度も聞いたことがない」のであるが、こ  
の箇所はルカ伝八章二七節以下の部分で、その後半部だけが話され  
ず、途中で終わるとするのは極めて不可解なことである。

悪霊につかれている男が、イエスにより悪霊から救われるという、  
その後半部分を聞かせてもらえない鶴藤は、幽鬼たちの追求する、  
自己の犯した罪から救われたいと切実に願いながら、ここでは聖書  
中の男のように救われはしない。つまり、お捨小母さんが聖書を途  
中で読み止めるのは、この時点において「私」がいくら望んだとし  
ても、救いの手が差しべられることがないということの意味して  
いるのではないだろうか。

それに対して、母と邂逅後の「私」は、この時と異なり、再度登  
場する「色内停車場の女」によって、救いへと導かれていく。

—— あら、まあ、こんな処で何していらっしやるの？ 蒼い顔  
してるじゃありませんか。あなたどうかなすったんですか？」／

私はその声に聞き覚えがあるような気がして、顔をあげた。白く  
美しいととのつた目鼻立ちだが、何処の誰とも思いつけなかつた。  
傘の内側の骨が顔を中心に八方に円く拡がっていて、逆光に浮い  
ているので、光背を負った仏の顔のように見えた。しかしその声  
は、ああ、私はふと思いついた。昨日色内停車場の下の共同便所  
の中から、怖ろしい言葉を喚いていた、あの何者とも姿の見えな  
かつた女の声にそっくりではないか。

巡礼姿で現れるこの女は、第一部で「私」をあれ程まで怖れさせ  
た女とは思えない、まるで菩薩を思わせるような存在へと変化して  
いる。遺棄した子との因縁から、仏の慈悲によって血の池地獄から  
救われたというこの女は、「私」にも念仏をとまえるように勧める  
のである。「私」は、それまでのかたくなな「私」からは考えられ  
ないほど素直に「——やってみよう。僕もやってみよう。」と答え  
ている。

しかし、「私」は、すぐに救われるわけではない。この女の導き  
で得能和尚の説教を聞く「私」の前に展開されるのは、長々と続く  
地獄の話である。母親の元に帰り、全てを赦されたはずの「私」は、  
何故そこにとどまることをせず、「色内停車場の女」の導きで、残  
酷な地獄の話聞き続けなければならなかつたのか。死んで火葬場  
に運ばれ、焦熱地獄に苦しまなければならなかつたのだろうか。



「私」は自らの意志で苛酷な罰を求めているように思える。多くの幽鬼に追い回されてきた「私」は、母の元に帰ることによって、ひとまず激しい罪の追求から逃れることが出来た。そのような場所を得た「私」は、そこに安住することよりも、むしろ母親の元を離れての裁きを求めている、明確に罰せられることを望んでいるのではない。母親の懐の中という、罰せられることのない、また自ら意志を持つ必要もなく、全てを母親に委ねておけば良い場所を離れて、積極的に罰せられることによって過去を精算し、新たな生を生きようとしているように思われる。母胎回帰は、その再生のために必要な行為であった。

「私」には女性依存、他者に対する甘えが多分に感じられた。換言すると、幼児性を色濃く残した男性として形象化されているといえるであろう。「私」と肉体関係にあった女性たちに対しても、女性を征服するといったものでなく、母親の胸に抱かれるといった関係ではなかったであろうか。

「私」は、このような生き方との訣別をも志向し、再生の意志を明確なものとして、母性から自立してゆく。

——怖い？ なるほどそうだ」と私の心が応えた。だが怖しさは、もう悲鳴をあげたり、駆け出そうとしたりするようなものではなかった。自分の考も及ばないような巨大な運命の掌のなか

に入っているのです、もう何が始まったも防ぎようがない、やって来る意志のままに、という気持である。自分が小鳥のように頼りないものに思われた。また自分の中にあつた昔の人間の心は、ただその反映のような翳りだけを残して無くなったような気持であつた。

地獄をさまよい歩き、多くの苦しみを受けた後で、「私」は、このような心境で裁きの場所へと進んで行く。「やって来る意志」に自らを委ねながらも、周囲の人々とは異なる潔さを感じられるのである。

第一部結末において、「生きなければならぬ、ここを過ぎて生きなければならぬ」とした「私」の生への意志が、転生という形でその目的を遂げようとしているといえるであろう。

伊藤整は、母親登場以後の部分を初出誌から第一書房版発行の過程で、四割近く加筆している。先の引用部分もその中に含まれるのであるが、それに加えて「序」を付けることにより、主人公・鶴藤の再生への意志を、より明確に、より強固なものとしているのである。

注

① 同時代評としては、「幽鬼の街」に対し、芝左内「小説採点簿」（文

芸」昭和十二年、九月号)に「そして彼の實驗小説が文壇小説と讀み誤られるところに、彼の實驗の小ささ、小説の低さがあるのだろう。」逸見広「文芸時評」(『早稲田文学』昭和十二年、九月号)「伊藤氏はこの作品を書き終って、ホッと深い息を吐いた事であらう。が、見極め得たものは、或ひは征伐し得たものは、結局形而下のものだけではなかつたらうか。」などが見られ、また「幽鬼の村」に対しては、名取勸助「小説月評」(『新潮』昭和十三年、九月号)「もつとも、その心靈世界の解剖がまだ十分批判的になされてゐるとはいへない。」や無署名(『三田文学』昭和十三年九月号)「テーマが必然にこの様な手法をもたらす、実はその必然が、ここではまだうなづけない。」などが見られる。

② 「中外商業新報」昭和十二年八月四日号の「文芸時評」中条百合子を発端に、同紙八月七日号に整、十、十一日号に百合子、十三日号に整という具合に行なわれた。「日本文学研究資料叢書、伊藤整・武田泰淳」(昭和五十九年一月、有精堂)収録

③ 平野謙「伊藤整の私小説編」「昭和文学私論」(昭和五十二年三月、毎日新聞社)

④ 瀬沼茂樹「伊藤整」(昭和四十六年八月、冬樹社)

⑤ 奥野健男「伊藤整」(昭和五十五年九月、潮出版社)

⑥ 佐々木基一「解説」「現代の文学」18「伊藤整」集」(昭和四十年十二月、河出書房新社)

⑦ ③に同じ。

⑧ 曾根博義「幽鬼の街」序論「国語と国文学」(平成元年五月特集号、東京大学国語国文学会)

⑨ 早川雅之「伊藤整論」第三章「初期短編群の世界」1恋人像の奇妙な二つの類型」(昭和五十年五月、八木書店)

⑩ ⑧に同じ。

⑪ 佐藤和正「街と村」試論「名古屋近代文学研究」第二号(昭和五十九年十二月、名古屋近代文学研究会)

付記 本稿は一九九〇年六月九日に行なわれた日本近代文学会関西支部春季大会での発表原稿に加筆したものである。なお、本文引用は、新潮社版「伊藤整全集」によつた。